

# モニタリングサイト1000



## シギ・チドリ類調査 ニュースレター

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2018年秋期概要

### 2018年秋期結果の概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2018年度秋期の概要をお知らせします。



#### 秋期も2000年以降最低値

2018年度秋期調査は、2018年8月1日から2018年9月30日までの期間実施されました。113ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査（2018年9月9日を基準日とした前後1週間の調査）への参加は96ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類 47種7,129羽、ヘラサギ1羽、クロツラヘラサギ26羽が記録され、秋期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計では、シギ・チドリ類 53種26,098羽、ヘラサギ1羽、クロツラヘラサギ70羽が記録されました。

2000年秋期以降の「全サイト」と「調査が継続されているサイトのみ」の最大個体数の合計を、ヒレアシシギ類を除いてグラフに示しました（Fig.1）。全サイトの最大個体数の合計は、前年度秋期と比べ4,914羽

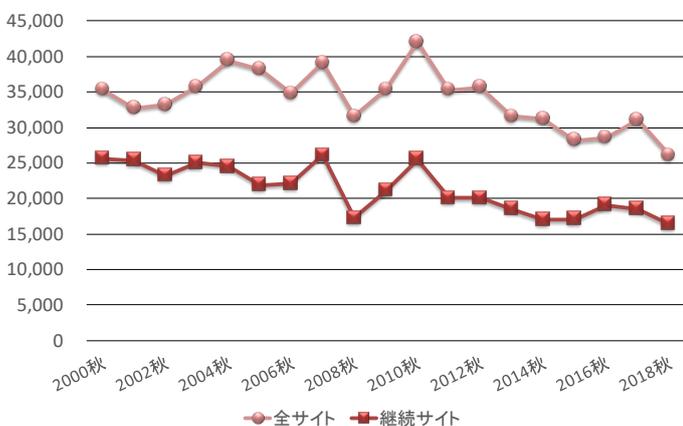


Fig.1. 秋期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移（2000年から2018年の継続サイトN=47: 2019/2/12時点）年次変動の大きいヒレアシシギ類は除外

（-15.8%）減少して26,098羽、継続サイトでは前年度秋期と比べ21,77羽（-11.8%）減少して16,347羽となりました。全サイト、継続サイトとともに2018年春期と同様に2000年以降最低の個体数を記録し、減少傾向が続いています。最大個体数は2010年の42,003羽に比べると-37.9%もの減少を見せています。

100個体以上観察された種の前年度比では、トウネン（-2,066羽）、キアシシギ（-895羽）、ムナグロ（-493羽）の減少数が大きく、減少率では、タシギ（-49.5%）、オバシギ（-36.4%）、セイタカシギ（-35.5%）が高くなっていました。秋期に観察された53種中39種が減少しており、全体的に減少傾向でした（Table1）。ホウロクシギ、オグロシギ、ミヤコドリ、タカブシギは前年比で増えていました（Table2）。

Table1. 秋期調査における種別の前年比減少数と減少率 上: 減少数上位種、下: 減少率上位種（2018年秋100個体以上確認された種）

減少数		2017秋期	2018秋期	減少数
1	トウネン <i>Calidris ruficollis</i>	5834	3768	-2066
2	キアシシギ <i>Heteroscelus brevipes</i>	3359	2464	-895
3	シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus</i>	1770	1447	-323
4	オバシギ <i>Calidris tenuirostris</i>	649	413	-236
5	タシギ <i>Gallinago gallinago</i>	444	224	-220

減少率		2017A	2018A	減少率
1	タシギ <i>Gallinago gallinago</i>	444	224	-49.5%
2	オバシギ <i>Calidris tenuirostris</i>	649	413	-36.4%
3	セイタカシギ <i>Himantopus himantopus</i>	417	269	-35.5%
4	トウネン <i>Calidris ruficollis</i>	5834	3768	-35.4%
5	キアシシギ <i>Heteroscelus brevipes</i>	3359	2464	-26.6%

Table2. 秋期調査における種別の前年比増加数と増加率の上位種（2018年秋100個体以上確認された種）

増加数・増加率		2017A	2018A	増加数	増加率
1	タカブシギ <i>Tringa glareola</i>	309	423	114	36.9%
2	ミヤコドリ <i>Haematopus ostralegus</i>	185	288	103	55.7%
3	オグロシギ <i>Limosa limosa</i>	120	192	72	60.0%
4	ホウロクシギ <i>Numenius madagascariensis</i>	71	123	52	73.2%
5	メダイチドリ <i>Charadrius mongolus</i>	1503	1517	14	0.9%

減少数、減少率が共に高い、トウネン、キアシシギ、オバシギの2000年からの最大個体数の推移をFig. 3に示します。トウネンは、変動が激しく、この個体数の変動は年による繁殖の成否を表していると考えられますが、全体的には増加した後に減少に転じています。キアシシギ、オバシギはトウネンに比べると変動が少なく緩やかな減少傾向を示していました。

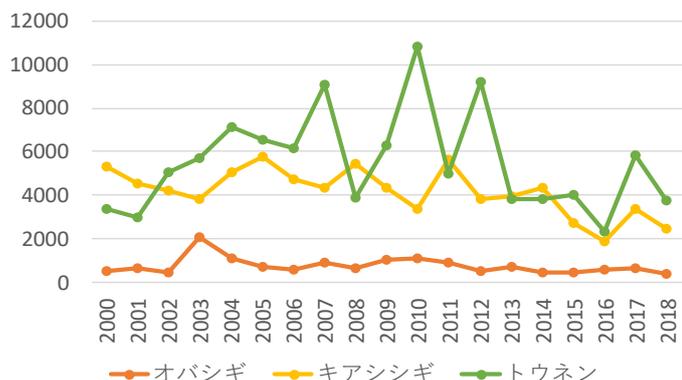


Fig.3. オバシギ、キアシシギ、トウネンの最大個体数の推移

### ハマシギの渡来が早まっている？

最大個体数における優占種の上位種は、トウネン（14.4%）、ミユビシギ（10.6%）、キアシシギ（9.4%）、ハマシギ（9.2%）、ダイゼン（8.8%）でした。前年度順位からは、キアシシギが2位から3位

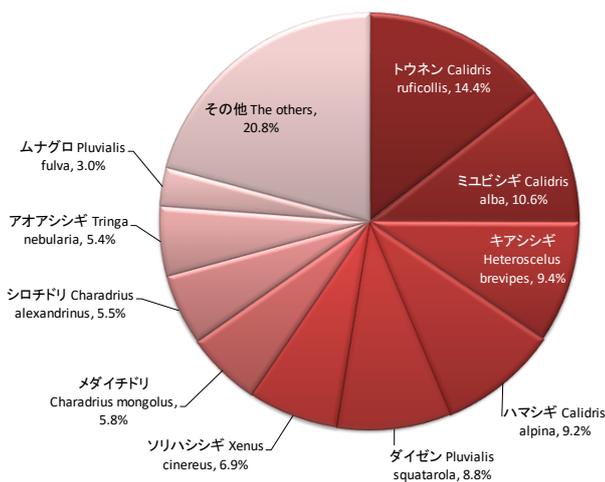


Fig.4. 2018年秋期調査におけるシギ・チドリ類の種構成

へ、シロチドリが7位から8位へ下がり、ミユビシギ、メダイチドリが入れ替わるように順位を一つ上げています（Fig.4, Fig. 5）。トウネン、キアシシギは、依然として秋期に個体数の多い種であるものの、前述のように減少数や減少率が高く、近年は、ミユビシギやハマシギといった日本国内で越冬する種が上位にあります。特にハマシギは秋期に徐々に増加する傾向がみられており、初冬期に渡来していたハマシギの渡来が早まってきている可能性があります。



Fig.5. 秋期調査におけるシギ・チドリ類の優占上位10種

サイト別に見ると、北海道東部、東北地域、関東内陸部および東京湾、中部・北陸地域、瀬戸内海西部、有明海、九州南部、沖縄・南西諸島と北から南まで前年度より最大個体数が100個体以上少ない地域が確認されており、2018年秋期の減少傾向が全国的なものと考えられます。

	増減数	増減率
北海道東北部	1295	145.2%
北海道東部	-507	-16.2%
東北太平洋岸	-965	-69.2%
東北日本海岸	-217	-51.5%
関東太平洋岸	345	15.4%
関東内陸湿地	-116	-12.9%
東京湾と相模灘	-558	-27.4%
駿河湾	51	637.5%
能登半島周辺	-168	-68.9%
伊勢湾	-1778	-57.0%
大阪湾周辺と紀伊水道	366	31.8%
山陰	-52	-34.9%
瀬戸内海西部と周防灘	-544	-17.8%
四国太平洋岸	89	70.6%
博多湾周辺	118	51.8%
有明海と不知火海	-554	-6.9%
九州南部	-163	-31.8%
沖縄本島	-430	-25.6%
宮古・八重山	-108	-17.3%

Table3. 秋期調査における地域別の前年比増減数と増減率  
減少した地域を赤、さらに30%以上減少した地域は濃い赤。（2017年、2018年と2年連続して調査したサイトのみ抽出）

## モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:ムナグロ(守屋年史) 2018年 秋期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

<http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史

電話/Fax:042-401-8661

メール: shigichi@bird-research.jp